特　集

郷通子学長からのメッセージ

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員　三村　恭子
お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員　川原塚　瑞穂

育児にかかわる若手研究者への支援のあり方を検討する「若手研究者と育児ワーキンググループ」（以下 WG）では、既に子育てと研究を両立させてきた先輩研究者の語りを集め、そこから得られる知見を活用することを重要視している。今回、WG 初のレポートを発行するにあたり、本学の学長である郷通子先生にお話を伺うことができた。郷学長は、生物物理学の世界的な研究者であると同時に、お二人の子どもの出産・育児をご経験なさった研究者でもある。2008 年1月 18 日、年始の大変お忙しい時期であるにもかかわらず私たちの申し出を快諾してくださった郷学長に、WG メンバー2 名（三村恭子、川原塚瑞穂）が、30 分ほどインタビューを行なった。ひとつひとつの質問に丁寧にお答え下さる郷学長のお言葉からは、ご自身の育児と研究に対する熱い思いが伝わってきた。また、WG の活動への重要な示唆も多々いただくことができた。郷学長が学生の頃から持っていたという明確なビジョン、その実現へ向けての情報集め、そして縁、絆…その内容を以下に掲載する。

――――「若手研究者と育児ワーキンググループ」では、次世代の学術界を担う、しかし社会的・経済的な安定が困難な若手研究者や学生が、研究活動と育児とを両立するためにどのような支援や情報、ネットワークが必要かを議論し、提示していこうと考えています。まだ発足したばかりで手探り状態ですが、これまでに得た知見から、実際に研究と育児を両立してきた先輩女性研究者の経験を伺い、それをロールモデルとして広く提示していくことの重要性を認識するに至りました。そこで私たちは、まず、本学学長でいらっしゃる郷先生にお話を伺いたいと考えました。といいますのも、女性で出産・育児をご経験なさっていながら、学術界では世界レベルの研究者であり、しかも国立大学法人の学長を務めていらっしゃるという、稀有なご経歴をお持ちの郷学長のお話は、私たちにとっても非常に得難い、貴重なロールモデルになるに違いないと思ったからです。

郷学長：このような形で話を聞きたいと、率直にアプローチしてもらえたことはうれしく思っています。

郷通子学長

――――理系ということも、大きなハードルだったのではないかと思います。今ではだいぶ支援が強化されてきていますが、本当に長い間、女性のライフスタイルへの配慮がない研究環境だったと聞いています。そのような中で、郷学長は研究と出産・育児の両立を実現なさってきたわけですが、その際、どのような困難があったのでしょうか。また、それはどのように克服なさってこられたのでしょうか。

郷学長：私の場合は、大学院にいたときから明確な将来像を描いていました。それは、キャリアとして研究をしっかり続けながら、家庭を持ち子育てをする、ということです。どちらも妥協しない、という強い思いがありました。研究は、もちろん真理の追究という、「知りたい」という願望があったから続けたかったですし、でもそれをちゃんと収入を得て、生きる手

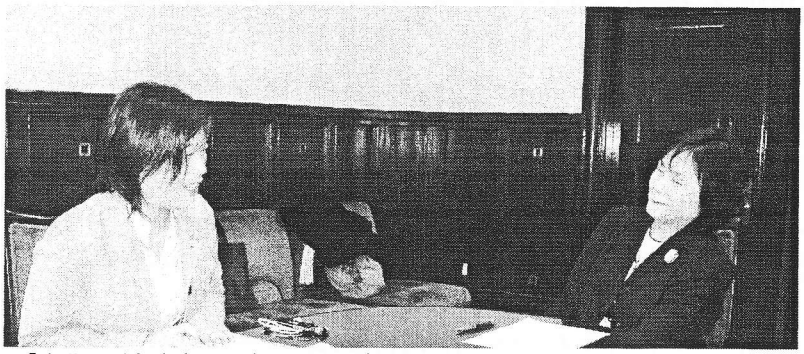
段として成り立つ形でやっていきたかったんです。そして、子育ても絶対にしたいと思っていたので、両方することを前提にした人生設計を立てていました。ですから、両立するために、専門分野も研究手法も、そして居場所も変えています。ご質問から受ける印象では、結婚や妊娠・出産をした後、キャリアパスをどうすべきか悩む、といった筋立てが前提になっているように感じますが、そこから既に違うんです。両方やっていくためにしなければならないことは何か、得なければならない情報は何か、という発想なんですよ。

それから、私は子どもが大好きなんです。だから、子育てを「困難」と表現したくない——研究も子育ても「困難を克服する」というイメージではないと思うんです。やりたかったからやったことなんです。もちろんその中で大変だったことはたくさんありますよ。そして、それを乗り越えるための実務的な知恵というものもいろいろあります。子どもが幼いうちのこと、病気になったとき、大きくなって人間としての付き合いが始まったとき･･･そういう話もまた別の機会にできるといいですね。

————機会がありましたらぜひ具体的な知恵のほうもお聞きしたいです。郷学長はそういう人生設計に関する強い意志に基づいた努力を重ねてこられているのですね。

郷学長：それもありますし、先輩の女性研究者のお話を聞きにいって、いろいろな決断をするときの参考にしていました。本校で学部生だったときには、物理で大学院にいった先輩がたや先生がたにお話を聞きにいきましたし、九州大学で助手をしていたときも、女性の先輩を見つけたら訪ね歩いていました。当時はまだ理系の女性研究者は少なかったので、どの話もとても貴重でした。実用的な情報も得られましたし、何よりも心から励まされましたね。中には、親切心からだったのでしょうけれど、「両立なんてできっこないわよ」とおっしゃった先輩もいました。でも、それで逆に決意を強くしたり——「よし、自分はやってみよう！だって時代が違う」と。と言いますのも、例えば、私が結婚した当時はまだ洗濯機なんてなかったんです。だからそれこそ六畳一間のアパートの、冷たい共同の水場で洗濯板を使って衣類を洗っていた、それが、洗濯機が出てきて、何とか買いこんだら、自分で衣類を絞らなくてよくなったのですから！洗濯にかかる手間や時間が大幅に減りました。そういう大きな時代の変化がありましたから、先輩の女性たちが断念していたこともできると思ったんです。そういう意味では、科学技術の恩恵も受けているんですね。

それから、私は実験系の研究室から理論へ移りました。実験系では、夜の 10 時までなんて当たり前の世界ですから、やはりいろいろ考えて実験しながらの育児は難しいと判断しました。それで、理論のほうで、しっかりと指導を受けて研究を進めていけるように、名古屋大学に在籍しつつ、指導教官に紹介してもらった早稲田大学の研究室に通いつめたりしました。



「自分はどう生きていきたいかと考えることと、育児について考えることは一体であると伝えたい」とにこやかに語る郷通子学長（右）

もう一つ、研究のキャリアにおいて重要だったのは、単名で論文を出すことができたことです。私の場合、博士論文と、世界的に私の研究が認められるきっかけとなった『ネイチャー』の論文の両方を単名で出すことが

できました。これには理論に移ったから可能だった側面もあるのですが、とにかく自分がしたことをきちんと認めてもらえたのです。連名だと審査も大変ですし、ここがジェンダーバイアスなのだろうと思うのですが、女性であるというだけで、ほかの男性研究者たちに助けてもらったはずと勘ぐられやすい、そういう文化的な認識が強かったんですね。

――――なるほど。家事労働と技術について、あるいは研究環境の選択についてだけでも一つの対談になるくらい興味深いお話ですね。

郷学長：そうなんですよ。そして、こうしたことが育児についての考えかたや選択、行動の基盤になっているんです。例えば、どんなに大変でも、私は子どもを一人だけであきらめたくなくて、もう一人産みました。本当は４人くらいほしかったんですけれどね。きょうだいがいるって素晴らしいと思うんです。たとえ親が早く亡くなったとしても、きょうだいが家族として残りますからね。それ以前に、子どもを産み育てるという貴重な体験ができて、心からよかったと思っています。人類が今まで生存してきた、その営みに触れるような、そういう生物としての感覚といいますか。

とにかく、妊娠・出産・育児を通して、ほかの社会生活では得られない特別な体験をすることができたんです。それはどこかで研究活動にもつながっているように思います。そして、研究もですが、育児は楽しい――「子育て＝つらい・困難」というかたちで、育児がネガティブな概念とペアになってしまうことを私は問題視したいんですよ。

――――それでは最後に、現在、あるいは将来、育児と研究の両立に向き合うことになるかもしれない若手研究者・学生に一言、メッセージをいただけますでしょうか。

郷学長：自分がやりたい研究をどう展開していくか、あるいは、自分はどう生きていきたいか、と考えることと、育児について考えることは、実は一体であるということを伝えたいですね。それから、自分は独りじゃないと知ることも大事です。育児ってとても夢がある営みだと思うんです。これからの人たちを育てていくのですから。私はどんな論文を書き上げたときも、そして評価されたときも、子どもを産んだ後、世界中がきらめいてみえたあの瞬間とは比べ物にならないと思っています。自然に笑みがこぼれるくらい、喜びに満ち溢れていました。そして、そういう感動を経験することができて心からよかったと思うのです。

もちろん今まさに幼い子を抱えている若手研究者のかたの気持ちが、どうしても目の前の困難なことに偏りがちになるのはよくわかります。そんなときには、私がお世話になった先生のお言葉を伝えたいです。彼は、「子育てしながらがんばっている女性研究者は、下の子が６歳になるときには、素晴らしい研究者になっているよ」と言って私を励ましてくださいました。いろんな女性研究者を見ていらっしゃったんですね。私はその一言にどれだけ支えられたか――そして、下の子が６歳のとき、例の『ネイチャー』の論文を出すことができたので、驚いたものです。そういう経験をしてきているので、今度は私がみなさんの支えになるようなメッセージを伝えていきたいです。

――――心強い励ましのメッセージをどうもありがとうございます。感謝して喜びを素直に受け入れることの大切さが身にしみました。今日は、本当に貴重なお話を、どうもありがとうございました。

参考資料：「サイエンティストライブラリー」、季刊『生命誌ジャーナル』47 号、2005 年秋号、（http://www.brh.co.jp/s_library/j_site/scientistweb/no47/index.html）